信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　トルストイ　『戦争と平和　第三部第一篇』

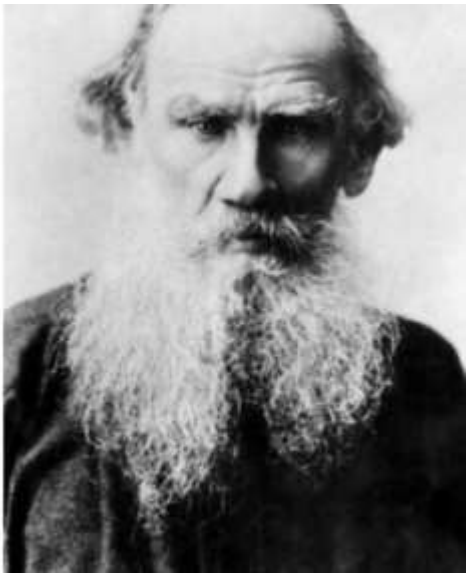
信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　[httP://twitcasting.tv/skyPebookclub](http://twitcasting.tv/skyPebookclub)
YouTubeLive　[httPs://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw](https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw)
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　[httP://bookclub.tokyo/?Page_id=714](http://bookclub.tokyo/?Page_id=714)
今後のツイキャス読書会の予定です。 [httPs://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284](https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284)
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
[httPs://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf](https://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf)
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

トルストイ

『戦争と平和』



第 346 回の YouTube 読書会の課題図書は、 トルストイ 『戦争と平和　第三部第一篇』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

作品の解説音声を公開しています。　[トルストイ『戦争と平和』解説]

メルマガ読者　TOTO さん

『戦争と平和』四巻　第三部　第一篇　トルストイ　感想文

「だれでも人間のなかには二面の生がある。その利害が抽象的であればあるほど、自由が多くなる個人的な生と、人間があらかじめ定められた法則を必然的に果たしている、不可抗力的な、群衆的な生である」(岩波文庫　四巻　P.24)

1812 年、6 月 12 日、ナポレオンの大軍がロシアに侵入し、いよいよ戦火を交える日も近い。
クレムリンにアレクサンドル皇帝を迎えた時のロシアの人々の熱狂ぶりが、不可抗力的に戦争に呑み込まれていく群集の凄まじい恐ろしい姿として想像させられた。

ナポレオンが、自らの正しさを信じ権力を我が物にしていても、結局は「必然的な法則」につき従っているのだと作者はいう。

「歴史上の事件においては、いわゆる偉大な人物はその事件の名前を示すレッテルにほかならず、レッテルとおなじように、事件そのものとはもっとも関係が小さい」(P.27)
「皇帝は歴史の奴隷にほかならない」(P.25)
歴史において人類の無意識的な群集的な生は、皇帝たちのすべてを自分の目的の為に利用していると、鋭く見つめるトルストイに、歴史に呑み込まれていくだけの人間の卑小さと「群集の生」の冷たい痕跡だけしか残らない歴史の恐ろしさを思った。

一方、自分の内面を真剣に見つめながら、懸命に「個人の生」を生きているピエール・ベズーホフとアンドレイ・ボルコンスキーは、自分の内にある嘘と向き合いながら、周りの人間の本質をじっと観察し、真理をみつけようと、自分の内にも世の変革にも、行動の時を待っているような期待を感じるのだ。

「この上もなく慎重に熟慮された計画は実践では何の意味も持たず　―中略―　すべてを決めるのは実際の行動全体がどのように、誰によって動かされているかだ」(P.91)と、確信していたアンドレイだった。

対戦経験を持つアンドレイが皇帝の周りにいる九つの派閥の討論を聴きながら個々の人間の愚かさを認識するのは容易(たやす)いことであっただろう。

戦争の実体験から見えた「戦争学などというものはまったくないし、あり得ない。いわゆる軍事上の天才などあり得ない」(P.116)という真理がこの討論を前に明らかになり確信するアンドレイだった。

そんな中で、戦争理論家の頑固なプフールに関心を持って観察しているアンドレイは見逃せなかった。やがて没落していくプフールの悲哀、人柄が皆に一目置かれているという人物像には興味があった。

皇帝の周りには、真理を追求するというよりは、自己保身や高名さを追い求めるだけの人間が集まっているように思えた。しかしそんな愚かな結集でも、ある瞬間に何かが結びつき大いなる結果を生み出すという事実もあると作者は書いていたようにに思っているのだが、私はちゃんと読めているのだろうか。

ナポレオンに、ロシアの教会の多さを、「後れている」、とあて擦られ、スペインの教会の多さをハラハラしながら指摘したアレクサンドル皇帝の使者のバラショフ。
フランス軍がスペインに敗北したことへのこれもまたバラショフのナポレオンに対するあて擦りだったのだが、理解されずに終わる。
ナポレオン皇帝ですら自分の思い込みで我を忘れている、このような面白いシーンがとても細かく描かれていて読みどころが多い。

ナポレオンの「後れている」は、あながち間違いではないのだ。

アンドレイが見据えたスペランスキーの先進的な改革への功績の本質への理解、ピエールの「皇帝と国民との協議」という、最も重要でロシアが変われるかどうかに関わる真理は、まだ二人とも決して発言する機会を与えられていない。

「空に立つ彗星をながめ、自分には何か新しいものが開けた」と感じたピエールが、虚しい生活の中でナターシャにまた同じ思いを見出したのだ。
アンドレイの愛と憎しみは、今後どのような展開になるのか。

ピエールとアンドレイのこれからの行方を見届けたい。
そのためには六巻通読しなければ！

（おわり）

メルマガ読者　シュダイさん

戦争と平和　第三部第一編　読書感想文

第三部第一編の冒頭ではトルストイの歴史哲学が語られる。

歴史哲学とは聞き慣れない言葉であるが、ヘーゲルの『歴史哲学講義』によれば歴史を思考の枠組みの中で捉えることのようだ。

以下、ヘーゲルの『歴史哲学講義』を引用しつつ、トルストイの歴史哲学について考えてみたい。

ヘーゲルによると世界史とは人間が理性によって精神の自由を獲得していく営みであるとされる。

ここでいう精神の自由とは人が自分らしくあろうとする自由である。

一方で個人の自由の追求は他者との軋轢を生む。

しかし、ヘーゲルはこれを得意の弁証法で解決するのだ。

すなわち個々で見れば対立しているように見えても、それらは弁証法的に解決され人類総体としてはプラスに転ずるというわけだ。

「見よ、世界精神が歩いている」

プロイセン領イエナに入城するナポレオンを見てヘーゲルはこう言ったとされる。

フランス革命の継承者であるナポレオンに人類全体を束ねる世界精神を見出したのであろう。

世界史の最終目的とは真に自由な存在、神への到達である。

したがって世界史とは神の示す一筋の大きな物語というわけだ。

これに対しトルストイは論考「進歩と教育の定義」（トルストイ全集 17）の中で、ヘーゲルの歴史弁証法を批判している。

トルストイによるとヘーゲルの歴史観は超越者である神を持ち出し、事後的に一つの体系に組み込む恣意的なものなのだ。

（引用はじめ）

自分自身には自由なものに思える彼らの行動のひとつひとつが、歴史的な意味では不自由であり、歴史の過程全体との関連のなかにあり、永遠の昔から決定されているのである。

（引用おわり）

ここでいう運命を超越者としての神の意志とするならばヘーゲルの歴史観と近い。

しかし、（先の話で恐縮だが）本書のエピローグで運命とは認識の外側にある不可知なものであるという説明がなされる。

すなわち歴史を超越者の意志とした場合、それは何億通りもの解釈が可能であり人間には認識不可能なのだ。

このトルストイの歴史哲学にはの思想カント、ショウペンハウエルの影響を見出すことができるだろう。

ここまでの議論から『戦争と平和』という小説から一つの歴史解釈を導くのは不適切であると言える。

すなわち多様な登場人物、視点、解釈の余地がある本書を一つの大きなプロットに収束させることは困難なのだ。

したがって、本書を祖国戦争を描いた愛国的小説という一つの物語に還元することはトルストイの望むところではないだろう。

（おわり）

メルマガ読者　おおい元気ぼっくすさん

ナターシャの回復

場面・登場人物がいろいろ変わる章だった。
戦時色が強まりロシア全体のナショナリズムが高まるとともに、前の章で婚約破棄問題を起こしていた
ナターシャの心の葛藤を中心に、登場人物の心の動きが事細かく書かれていた。

個人的に、ナターシャの動向は気になって仕方ない。
結局、ナターシャは今でいう自律神経失調症になったのではないかと考える。
精神医学の進んでいない当時、精神疾患はそう簡単に回復（寛解）するものではなかっただろう。
ナターシャは薬を処方されたようだが、今日でも薬物療法はより慎重にならなければならない。
重要なのは、自分自身の中に答えがあるということ。そもそも人には「よくなる力」がある。それを対話の中からどう引き出すか。それが回復のポイントとなる。
この作品の中では、ピエールがそうしたカウンセラー的な存在であるように思う。もっともピエールにはナターシャに対する愛情もあるようだが。恐らくこの点は今後深まりをみせるだろう。

さらに「薬より歌と宗教（祈り）」ということ。
あるカラオケ会社の、大学との調査研究で、歌（カラオケ）はストレス緩和に大きな効果があるということが科学的にも証明されている。
「あたしまた歌のお稽古をしようと思いますのよ」「これもやはり修業のひとつですもの」（新潮文庫 P.147）。
こうした言葉がナターシャから出るということは、回復に向かっていると思って間違いない。
そして「宗教（祈り）」。遠藤周作の『沈黙』にもあるように、祈っても神は何もしてくれない。
ただナターシャの場合は、単なる悔い改めではなく、自己の内面を見つめ直そうとしている。このことがやがて自分の認知の歪みに気づくこととなり、あるべき方向へ自らを導くように思われる。

不思議なのは、ピエールがフリーメーソンに入り、マリアも強い信仰心をもつ。そこにナターシャが悔い改めの気持ちから宗教に目覚める。
もしかすると、『戦争と平和』の背景には「宗教」というキワードが隠されているのかもしれない。
そこは今後に期待する。
ひとまずは、ナターシャは回復に向かうだろう。

（おわり）

おおい元気ぼっくすさんのご著書が発売になりました。
『人生 100 年を楽しむために　ワクワクリベンジ読書のすすめ』

メルマガ読者　デュークさん

『戦争と平和』 第三部第一編23までの感想文

　これから戦争の場面が多くなっていくのかもしれませんが、ここまでのところ「戦争と平和」と言っても戦争部分は少ないなといった印象です。
　今回の読書会の範囲でも、将校たちによる作戦会議やナターシャのその後が描かれていて、ニコライのちょっとした戦闘シーンはありましたが、交渉が決裂しやっと宣戦布告したというところでした。

　アンドレイがロシア軍内を 9 つの派閥に分類し、大多数を占める第8の派閥についてはさらにその中を 5 つに分類していて、どれだけ分類好きなんだよと思いました。
　またプフールについて性格づけをするところでも、これはアンドレイというより作者のトルストイが言っているという感じで書かれてましたが、ドイツ人、フランス人、イギリス人、イタリア人、ロシア人の自信について分類されていました。
　アンドレイは人をよく観察する人なんだなと思いました。

　ナターシャが体調を崩している本当の理由をソーニャは知っているのだから、一緒になって看病なんかせずに「自分でやらかしたことを悔いて落ち込んでるだけだから、時間がたてば良くなります」とでも言って、貧乏なロストフ家に医者とか薬とか無駄な出費をさせないようにするべきだと思いました。

　解説音声で「男は意志、女は知性」というのがありました。アンドレイは意志の人だと思いますが、ナターシャには今のところ知性は感じられないなと思いました。ピエールはナターシャにも好きだと言えなかったし、貴族の集会でも自分の考えを受け入れてもらえない可哀想な人だと思いました。ピエールの気持ちがナターシャにも政府にも届く日が来てピエールも意志の人となり、ナターシャも知性を感じられる日が来るのか、この先が楽しみです。

　フランスでは王政にふところ事情を開示せよというところから革命が起きたということですが、今回の場面でのロシアの場合は他国との戦争中だったというところが違うのかなあと思いました。

　皇帝万歳と叫んだり、熱狂的になるところは戦争中はどこもそうなのかもしれないけれど、日本人が天皇を崇拝するのに似てるなあと思いました。

　　（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『戦争と平和』 第四巻　P210 までの感想文

　いよいよ戦争が始まる気配がしてきましたが、私はとりあえずナターシャが少し元気を取り戻してくれたのが良かったなと思いました。

　本当の所というか、心底回復したわけではないと思うけど、自分を取り繕う事はできている感じなので、良かったです。
　もし、自分だったらこれから先どんなモチベーションで生きて行けばいいか分からないと思うし、正直、生きるのがすごく辛いと思う。
　これから世の中が混乱してくるので、それどころではないと思うけど、ナターシャに幸せが訪れることをすごく願っています。

　私的には、ピエールと良い感じになって欲しいなと思いますが、

　（引用はじめ）

ピエールはもうロストフ家には来るまいと心に決めた。（P.186）

　（引用おわり）

と、なっていて少し残念な感じがしました。

　私は諦めが悪いので、決めた。だけならまだ可能性あるかな？　と思っていますが、それどころではない状況になってくるのかなと思ったりもします。

　今回の範囲でちょっと面白かったのは、ペーチャが皇帝を見たいために、おばさんに肘鉄くらわせて怒られる所です。

（引用はじめ）

「なにさ、坊や、突き飛ばしたりして。ご覧よ――みんな立ってるんだよ。もぐり込めるもんかね！」(P.189)

（引用おわり）

　おばさんが怒ってる感じが伝わって、ペーチャの子供っぽさが面白いなと、思いました。その後ちょっと、ひやっとしましたが、今後もどうなるのか気になりました。

　今回も読む事はどうにかできましたが、感想文となると難しくてどう書いていいか分からなくなりました。
　でも続きも気になるので、読み進めたいと思いました。

　（おわり）

メルマガ読者　まこさん

『戦争と平和　第三部第一編』読書感想文

ここまでの読書では、トルストイの描写力に魅了され、登場人物たちに感情移入し一喜一憂していましたが、今回の範囲ではむしろ、延々と続く戦争の原因についてのトルストイの考察や、皇帝の周りにいる人間の観察などに強い興味をおぼえました。それでなくても戦争について考えない日はない現在、この「戦争と平和」を読んでいると、人間が愚かだということは分かっていてもたびたびやりきれない気持ちに襲われます。ただ、人間の「自然の諸力に支配された群れとしての生」、「人間はあらかじめ自分に定められた法則を否応なく遂行せざるを得ない」との論には、そうかもしれないがそうならないようにあがき続けたいと思いました。二章で槍騎兵たちが川でおぼれる場面は描写が見事かつ冷徹で思わずその無駄死にぶりに憤りをおぼえますが、元来無駄死ににあふれているのが戦争なのだと思い至りました。

九章でアンドレイの状況理解というかたちで描かれる軍人たちの様子や九つの派閥の傾向もトルストイの筆が冴えて、もはや喜劇的でさえありましたが、こういう人物たちがいくさを動かしている現実を思うと笑えなくなるし、古今東西状況は変わらないと思ってしまうのでした

これまでは登場人物たちの行く末が気になってとにかく先を急いで読み進めるという読書でしたが、今回は、トルストイのメッセージはどういうものなのか、そもそも小説の構想の初めにあったデカブリストとは何だったのかというところが気になってきました。二十章の皇帝の檄文中の「協議」という言葉や、二十二章の「フランスの三部会に匹敵するエタ・ジェネローの」という箇所などは自分一人の読書ではただ読んで終わりでしたが、宮澤さんの解説でその重要性を知り、ますます興味をもつ範囲がひろがってきました。

「戦争と平和」を読んでいるとどうしても「戦争とは」、「人間とは」と考え気分がおもくなってしまいますが、先日日経新聞の記事で、小林秀雄と正宗白鳥との間にトルストイの日記をきっかけとした「思想と実生活論争」なるものがあったことを知り、両人のエピソードがおかしくて、思いがけず気分転換のプレゼントをもらったようでした。

（おわり）

メルマガ読者　ワカチコさん

『戦争と平和　第三部第一篇』 感想文

凍らない港を求めたロシアの南下政策に因って、ウクライナとルーマニア間のモルダヴィアは、ロシアとトルコ、西欧との争いが絶えない場所であり、アンドレイはアナトールを見つけだして決闘をするために、モルダヴィア軍のクトゥーゾフ総司令官付として軍務に復帰します。アナトールを見つけられず、その後、皇帝がいるドリッサ近くの西部軍総司令部へ向かう途中で、ルイスイエ・ゴールイに立ち寄ります。

ボルコンスキー老公爵と娘マリアには親子の深い愛情がありながら、なぜ過剰に辛く接するのか。判然とは書かれず、書かないことによって一層際立つ文章の意図を私は第一部から考え続けています。アンドレイはマリアのことで生まれてはじめて父を責め、喧嘩別れとなり、幼いニコーレンカを膝に抱いても、彼の中に以前のやさしい愛情が見当たりません。外面的には変わらない静寂の中にある家族は、心のつながりを失って、敵意がお互いをばらばらにしているとアンドレイは感じます。

（引用はじめ）

『自分が娘を苦しめずにはいられないこと、それが彼女の当然の報いだということも、やはり知っていた。』
『なんでこいつは、わしが悪人か馬鹿な年寄りで、わけもなく娘から離れ、フランス女を近づけたなどと思っているんだ？こいつはわかっていないんだ』
『その原因は妹の友だちになるべきはずではなかった、くだらない女です』
『友だちってなんだね、君？え？そりゃ言いすぎだろう！え？』
『悪いのはあのフランス女です.....』『ほう、宣告をくだしたな！.....宣告をくだしたよ！』〈岩波文庫四巻 P.83-85〉

（引用おわり）

マリアの『お話し相手』であるブリエンヌを、アンドレイはなぜ『友だち』と口走ったのか。
その瞬間、父がなぜ激昂するのか。妻リーザのことをアンドレイが父に頼んだ場面と同じ気配がして、言葉では書かずに、無言で何かを織り込んでいる印象を私は感じます。
一層目として、家の中の事情がブリエンヌから父に筒抜けで、家族の関係が壊れていると読み、二層目に『当然の報い』『くだらない女』『友だち』に反応した『言いすぎ』『宣告』といった、響きが立ち過ぎる表現の意図を理解したいです。

トルストイの道徳的教義の信奉者であり、個人秘書でもあり、のちにトルストイ博物館館長となるニコライ・グーセフ（1882-1967）Ｎｉｋｏｌａｙ Ｎｉｋｏｌａｅｖｉｃｈ，Ｇｕｓｅｖが書いたトルストイ伝『ＬＥＶ ＮＩＫＯＬＡＥＶＩＣＨ ＴＯＬＳＴＯＹ ＭＡＴＥＲＩＡＬＹ Ｋ ＢＩＯＧＲＡＦＩＩ ｃ 1828 ｐｏ 1855 ｇｏｄ 』〈P. 638-640〉〈参照『佐藤, 2015, 94 』〉を Google 翻訳に流し込んでみると、マリアのモデルであるトルストイの母、同名のマリアは結婚前にルイザというフランス人女性と同性愛的な友情を交わしていたことがモスクワ中に知られたことと、その騒動を『猥褻』だとして、マリアが一族から厳しい仕打ちを受けたことが記されています。

私にとって『悪魔』はクラーギン家を連想させますが、二巻 P.83, 86 でボルコンスキー家の女性たちの場面にも『男』『悪魔』が出てくる意図や、マリアがブリエンヌにする『ご寵愛』の振舞い、ほかに幾つも感じる言葉の空白が、グーセフの

評伝によって、するすると読みほどけてゆきました。マリアがブリエンヌに資産をあげようと思ったり、マリアは不細工なのだけれど、時折とても美しい目になったりする瞬間も、評伝の実録と一致します。ボルコンスキー老公爵は、マリアが誰かと結婚できるように心から願っており、そのためにはブリエンヌをマリアから離すしかなく、マリアを愛しながら憎む理由が今は理解できます。

クラーギン家の淫靡な暗闇を、ボルコンスキー家も『冬の庭』の奥の媚態に隠していると、トルストイは暴いており、モスクワで周知の事実だった母マリアの事件を、本作の出版当時の読者には判るように『戦争と平和』のマリアにも背負わせ、ふたつの公爵家から名誉的価値を永久に剥ぎ取ろうとする執念を感じます。道徳的倫理からの逸脱が、家族や民族の繋がりを破壊してしまうと、もう元には戻れないのだということを、家族の内側から欺瞞なく暴くことが、トルストイの思想運動であり、活動であったのだと私は考えています。

四巻 P.197 で『エタ・ジェネロー/階級総合の異例集会』や『社会契約論』『国民と協議するために皇帝が帰還するという檄のなかのことば』の本来の意義に、ピエールだけが気づいており、ラストプチンの振り付けなのか、まんざらでもない皇帝の熱弁に、貴族や商人たちが加担する狂信的な国威発揚のムードによって、法の下での話し合いを持てないまま、戦費の拠出と民兵の駆り出しに扇動されてしまう場面の重要性について、読書会の『戦争と平和』解説＃58を視聴してはじめて理解することができました。プロパガンダの檄に興奮した翌日、はたと我に返る貴族たちと入れ替わって、これからロシアの民衆が登場するんだなと思います。

（おわり）

メルマガ読者　玉井さん

マトヴェーヴナおばさんに学ぶ現代国防論

というタイトルの博士論文を提出したら今年も留年が決まった。

▼あらすじ（第 3 部第 1 編第 1 章～第 23 章）：
ロシア皇帝の側近バラショフがナポレオンに「戦争やめへん？」と提案したけど拒否られて戦争勃発、ロシア側の作戦会議では様々な党派が生まれたけどこれに対してアンドレイは「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ」的な発想で野戦部隊を志願してる隙にニコライが勲章をもらってナターシャも回復してペーチャもロシア軍に入った……的な話。

▼読書感想文　～　オススメの党派について：
第 9 章では前述の通り、ナポレオンのロシア侵攻を阻止すべく、ロシア軍では九つの党派が形成され指導権争いが行われる。要は「この戦争誰が仕切んねん」であり、そこで今回は九つの党派の特徴を整理した上で、我がオススメの党派を紹介する。

【第一の党派】
　プフール率いる戦争理論家集団。戦争を科学的に分析の上で「軍学」なるものを駆使してナポレオンをやっつけろ。
【第二の党派】
　バグラチオンおよびエルモーロフを中心とする民族主義集団。戦争は軍学よりも「やる気」でナポレオンをやっつけろ。
【第三の党派】
　アラクチェーエフも在籍。第一党派と第二党派の中庸を取りつつナポレオンをやっつけろ。
【第四の党派】
　アウステルリッツの戦いでナポレオンに圧倒されたことで戦意喪失、そのため戦争反対ラブアンドピースを謳う集団。
【第五の党派】
　バルクライ信望者集団。有能なバルクライに権力を与えるべきであり、無能なベニグセンでは司令官は務まらない。
【第六の党派】
　ベニグセン信望者集団。有能なベニグセンに権力を与えるべきであり、無能なバルクライでは司令官は務まらない。
【第七の党派】
　「ぶっちゃけ皇帝が軍を仕切ったらええがな」を主義とする、将軍や侍従武官による集団。
【第八の党派】
　己の利益の為に戦争を手段として用い、一貫した主義の無いいわゆる「風見鶏」的な集団、かつ、最大勢力。
【第九の党派】
　皇帝は軍へ介入するのではなく国家統治（国民精神の鼓舞）をすべきである、と主張するシシコフを筆頭とする集団。

以上、合計九つの党派が生まれ、そらまあ九派閥もあれば議論紛糾するのは当然なのであって、で、オススメの党派を挙げる前に私が言いたいのは「感情があるから戦争は起こる」という事である。全人類の感情は千差万別であり、そのあらゆる思惑が思惑同士で衝突するのは避けることができない。もし、この世から争いを無くす手段があるとすれば、それは「全人類の感情を統一する」あるいは「全人類からロボットの如く感情を排除する」といった荒唐無稽な世界を夢想するだけである。そしてこれに通じる極論が、第 343 回読書会で紹介した「それってあなたの感想ですよね？」という幼稚な発

言であり、そのため、あの優しい私ですらこの発言に激怒したのである。では、それを踏まえてオススメの党派の話題に戻りますが、合計九派閥もあってジャマくさいので消去法で選ぼうと思う。まず、第一党派＆第二党派＆第四党派＆第五党派＆第六党派は感情の度合いが極端過ぎるので却下。そもそも僕はラブアンドピースとかいう言葉がキライなんですよ。で、第七党派は、過去に皇帝が軍を仕切ったら大敗したので却下。第八党派は、もはや戦争関係あれへんがな(却下)。で、残る第三党派と第九党派ですが、まず第三党派はアラクチェーエフが作中にあまり登場しないので明言が難しいが(アンドレイとの対話から冷徹な人間かと思われるが)、これは第九党派も同様、戦術と士気のバランスが期待できそうな気がする(将軍同士で内輪揉めの懸念もある)。以上のことから、私のオススメの党派は、第三党派と第九党派の合体、つまり「第十党派」である。

といったことを考えながら、九つの党派が最終的にどうなったかというと、第九党派が皇帝に受け入れられ、そのため皇帝は軍から去ることになり、(ここからネタバレになるけど)続く第 2 編ではバルクライが指導権を握るがバグラチオンが指示に従わないので戦局も悪化してバルクライは責任を取ってクビにされた為、安定と信頼と人望のあるクトゥーゾフが仕切ることになったのである。

以上

（おわり）

憲法にとらわれない民兵組織による国防は歴史的標準である

フランス革命によってブルジョワ階級を政権に組み込んだフランスは、ブルボン王朝に通じる周辺王国の反革命的介入を阻止すべく国民皆兵制を整備した。これが、ナポレオンの大陸軍（グラン・ダルメ）のはじまりである。ナポレオンの出世は、門閥にとらわれない実力主義によって可能になったのであり、彼の勇敢な部下も、同じく実力主義によって組織されていた。これが世界最強の大陸軍を支えていたのである。

フランス式の教育を受けてきたアンドレイやピエールは専制君主制のロシアの近代化が必要だと思っていた。読み書きもままならない農奴を抱えた地主貴族が支配者層とあっては、ブルジョワ的産業資本は育たないし、国の生産力もあがらない。

ナポレオン戦争の本質は、先に近代化した貿易大国のイギリスと、本来は農業国家でありながら革命によって急進的な近代化を遂げたフランスとのヨーロッパ大陸における覇権争いであった。

ロシアは、先に述べたとおり、地主貴族の支配する農業国で、自国の産業基盤が弱く、工業製品をイギリスからの輸入に頼っていた。イギリス・フランスと比べても近代化の後進国であった。スペランスキーが近代的改革しようとしたが守旧派に邪魔され頓挫した。

ナポレオン軍の侵攻に徴兵で対処するか、義勇兵や民兵組織で対処するか、方針が定まらない。皇帝と国民の合意もないまま、あいまいな封建的な権威によってモスクワには挙国一致体制ができあがる。

全然話は変わるが、三島由紀夫の結成した「楯の会」は、民兵組織である。日本国憲法の私生児である自衛隊で日本を守るのは無理ということで、ここは一つ、民兵に頼ろうと、三島先生は考えたそうである。三島先生の考えは、意外や意外、モスクワ陥落後に、民兵隊を組織したデニーソフやドーロホフなみに骨太で、なおかつ反動的あった。

（引用はじめ）

ヨーロッパ諸国の軍事制度を研究した者は、むしろ戦前の日本の国軍一本化がむしろ異例であることを知つてゐます。正規軍以外の各種の軍隊の並立のうちに発達してきたヨーロッパ軍事制度の歴史に鑑み、日本の戦前の軍事制度に関する常識を、戦後の平和憲法下の特殊事情を考慮して、一ぺん徹底的に考へ直し、真に有効な現代的方途を発見してゆかなければなりません。
現に戦時中も、総力戦体制と称しながら、軍の権力構造を保持するために、知識人や行政上経営上の指導者をも一兵卒として召集し、無理な一本化を急いだ弊害のみを助長させた教訓は近きにあり、むしろ、戦争末期は市民軍の養成を別途に推進すべきであつたのであります。
－三島由紀夫「祖国防衛隊はなぜ必要か？」（ウィキペディアの『楯の会』より引用）

（引用おわり）

アンドレイもピエールも「まずは隗より始めよ」で、自身の領地の近代化に取り組んだ。アンドレイの改革は、ナポレオンの侵入で頓挫、ピエールは、領地経営の才に乏しく、成果をあげられなかった。

それでも、彼らは、少なくとも専制君主制を、穏やかに立憲君主制に移行していかなければ、ロシアの未来は暗いと危機感を抱いている。近代化を推し進め、ロシアの国力を強化しなくてはならない。でなければ、ロシアに勝利したナポレオンが、イギリスとの覇権争いに終止符を打った暁には、ロシアはフランスの衛星国として分割統治されてしまう。その衛星国の支配者は、ナポレオン一族にとって代わられるだろう。

そうなれば、ますますロシア固有の文化は破壊され、アンドレイやピエールが反感を抱く、リーザ的なもの、エレン＝アナトール的なもの、つまりは、おフランス直輸入の享楽的個人主義とそれに伴う道徳的退廃によって、ロシアの魂は徹底的に蹂躙されつくすだろう。

祖国戦争の背景には、分割統治されるかもしれないロシアへの危機感が隠されている。
第三部第二編に描かれる「ボロジノの戦い」では、ロシアの民族的ファナティシズムが玉砕行為となって炸裂する。

（おわり）